



北越奇談

三

ル 4  
4251  
3





4251  
3

早稲田 大學 図書館  
30.1.18  
藏 書

北越 奇談 卷之三

北越 崑崙橋 茂世 述  
東都 柳亭 種彦 校合

玉石

頸城郡 糸山の西三里の土底とくろ濱のり以所の漁夫  
三四月のる鯨魚場とくろりて糸山の海岸とくろりて  
八九里佐州萩のるの尻液いかり舟を放ら綱とくろり  
釣とくろり所あり凡以海底数十るの下少く小すきき  
のりて奇本奇石を生とくろりとのけで筭入べりぞ赤珊瑚  
黒珊瑚青白琅玕拂子石木賊石海松海柳ホナリ



左の四よりごとく珊瑚海松の類に常に於不・実・文・止  
合浦ともつらづき呼ぶ魚舟の網にかかりて根より引ぬけ  
てのぐるりのおろくともいれ水成出するともいふ水垢の色  
もつらづき白ひあつくもいふもさるるべし清き水  
ひらひらしく洗ひ日に乾くとさるる潤色光沢其奇つべし  
又自然に大風波のよめららざればありて淡に打あげ砂  
石のつらづき拾ひぬるるもの殊に光沢絶妙なり拂子石琅  
玕本賊石の類に稀にあらざる赤珊瑚のともいふ今絶てま  
とつらづき十年前もつらづきの数足目く漁夫の網にかかりぬる  
とくども其奇おなるとはあつども皆海底にあらざるなり

其折まらざるはたつらづき赤色もあつてもありとつらづき其後ぬる  
の者漁夫の詠成つて是を以て終おるなり今舟にぬれぬ  
とくども其おる人妻もあつていぬるともいふ故に價もま  
るる一稀俗に薩大貝ともいふあり玉石の類に琅玕に似  
とも光沢なく形屈曲ともいふ不雅ともいふ水成出する時淡紅  
いしく愛もあつて凡るに曝らるとさるる即白く總て珊瑚より  
以下皆海中にあらざる中からつらづき玉石の類にあらざる  
水成するれ乾くとさるる即金石のともいふ海濱に年々  
玩するに己に五六品を以て好むの客にふけるの其れ  
海数十里の深き稀に奇本玉石成拾ひぬるとありとつらづき

七代巻之三

三



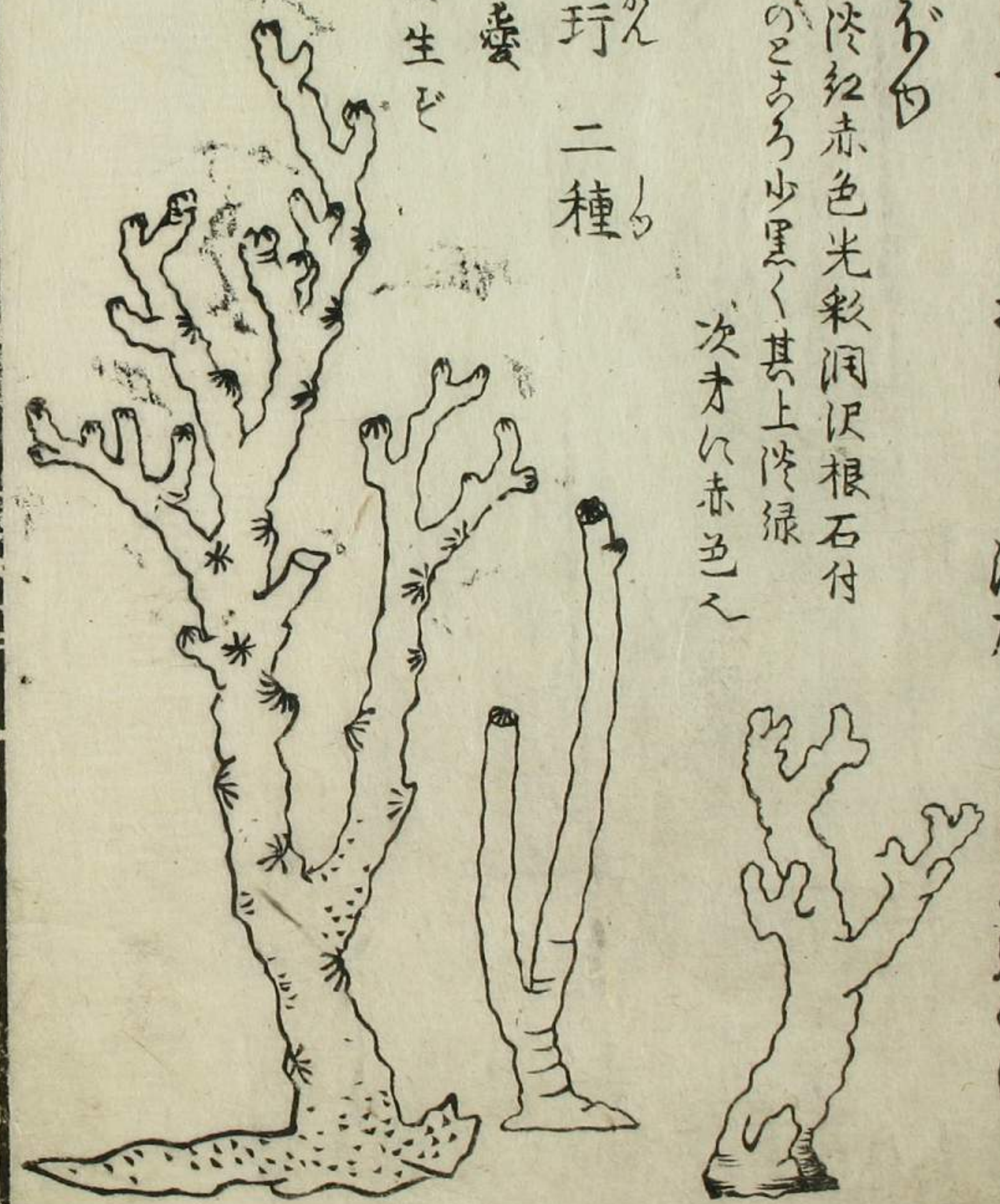
凡波のよみれ打めぐるおれくく海底より出れりあけきり  
へのしじとあぢりや

珊瑚 淡紅赤色光彩潤沢根石付  
のこあろ少黒く其上淡緑  
次方の赤色へ

青白琅玕 二種

光彩可愛

石上の生じ



木賊石 清白里節

似琅玕

奇玩

絶品

一根数莖うらめ

玉林のど



黒珊瑚

光沢潤色

人とてき



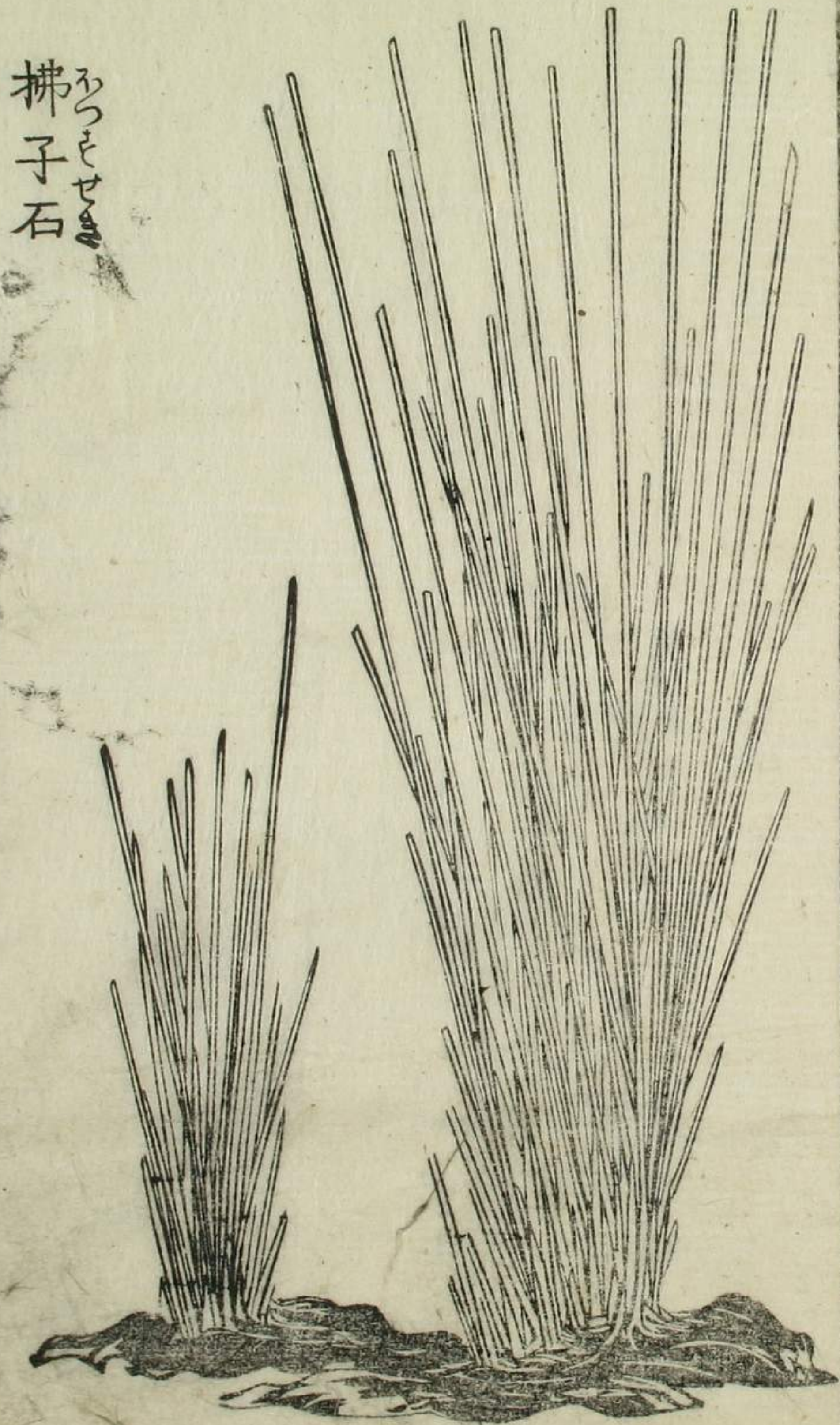


海松うみまつ 一 欽樹

洞黒色葉  
似榧少く  
ま



海柳うみやなぎ 葉細き

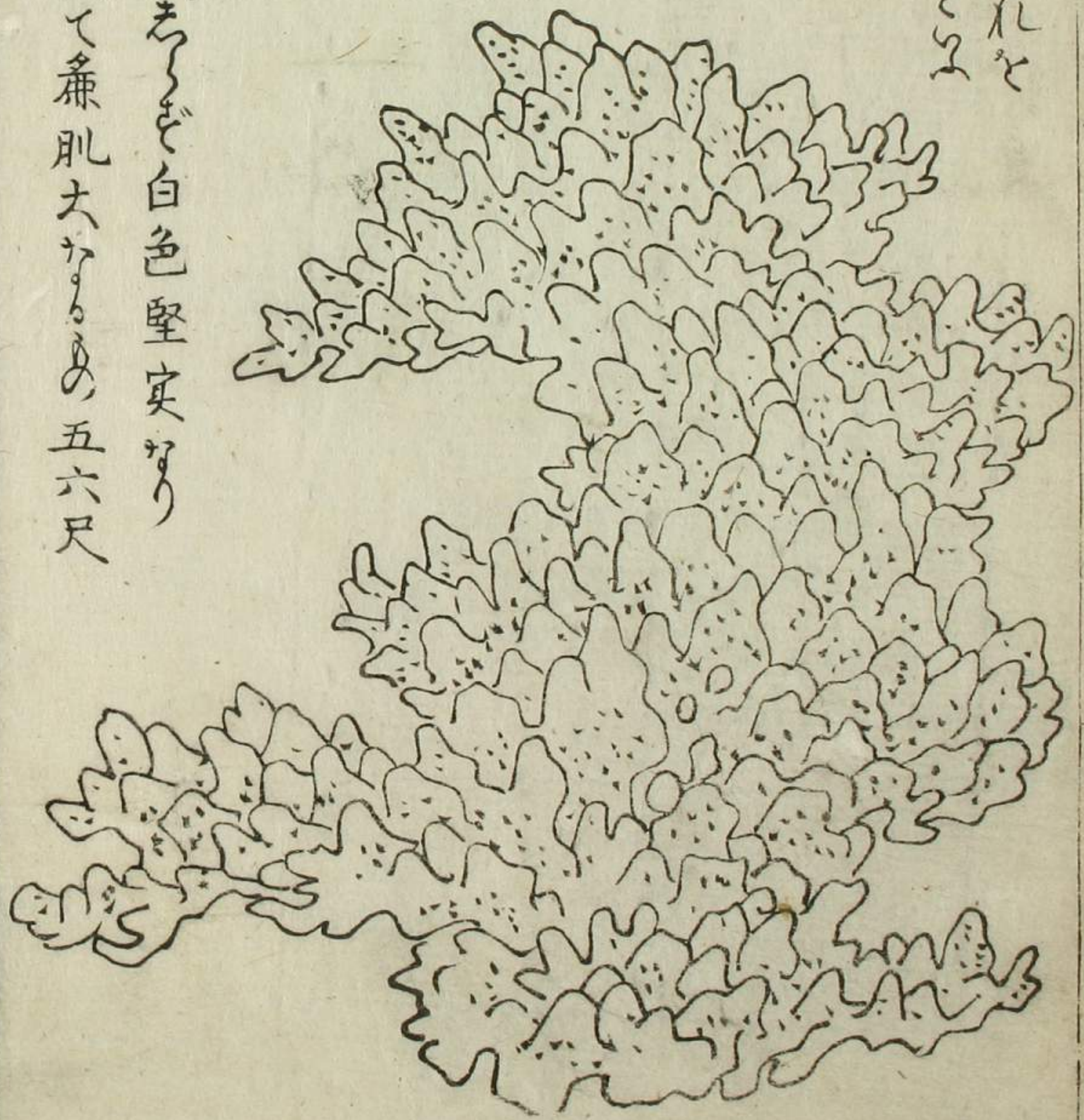


拂子石ふしし

一根数百莖を生ト長物二三尺短者。もの四五寸大さ  
也銀針白玉鮮潔之を賢実しく折す此机上の絶玩なり



海濱の俗を  
ちよとよとよ



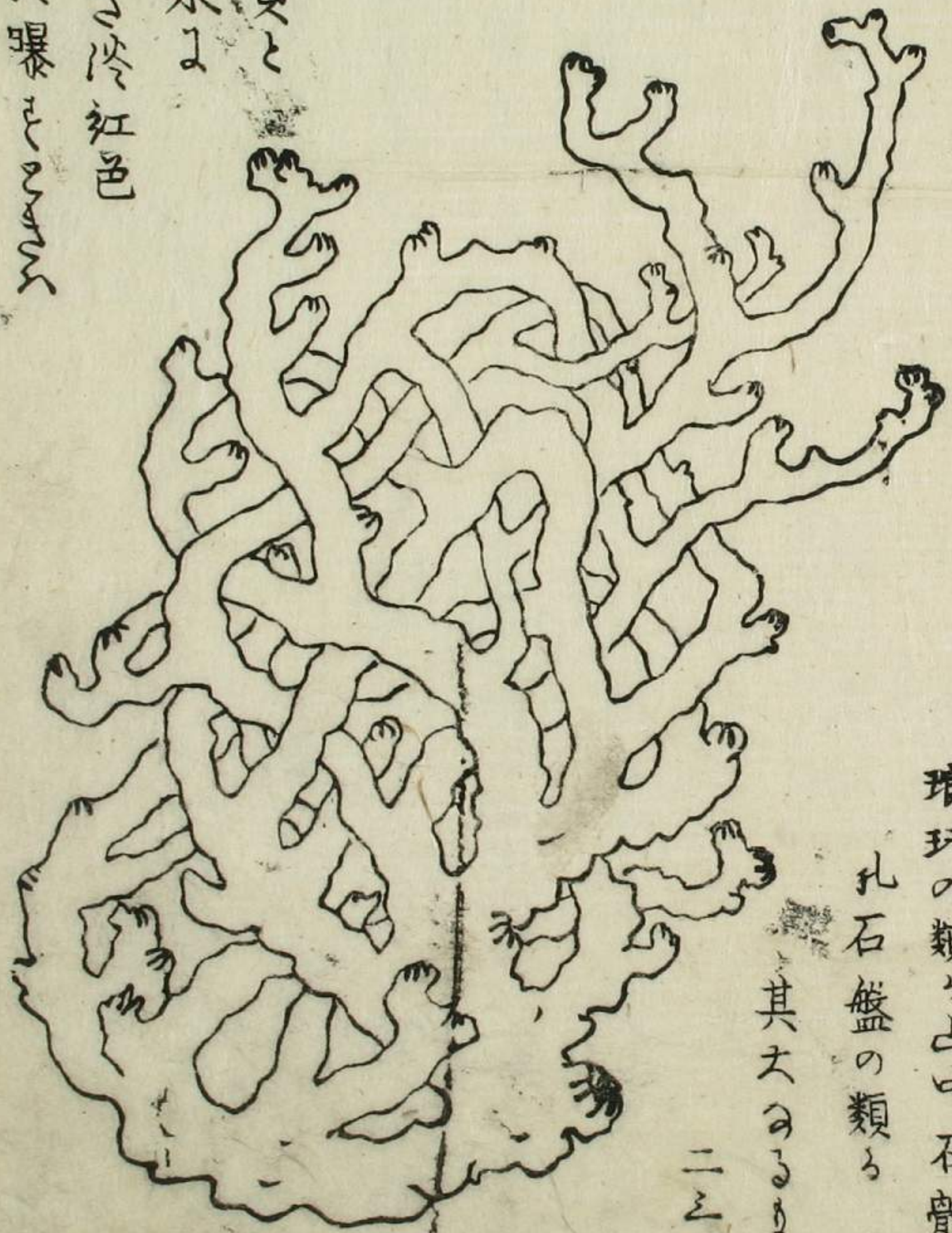
塩凝漢名代ちよとよ白色堅実なり  
菊銘石に似て兼肌大なりよの五六尺

琅玕の類う山中石髓

孔石盤の類う

其大なるもの

二三尺



俗に薩大貝と  
林とよの水よ

あるとよ冷紅色

日に曝すとよ

淡白堅実なり



其二

浦原郡河内谷の奥陽回寺より東南一里山谷の間流に  
 ありしがたづねおるに水昌石を尋ね家瑛石白瑛石を  
 尋ね谷より推しま同く薪を買て五泉の市に賣寛政の  
 以りし人一日推まかやうある石の大サ斗のどくならん代換ひ  
 尋りて市の亭人とて法清一商家某なるもの其石の青白  
 色にとりてをりあるも水鏡はゆるがどくあり代以つたよ  
 推まの承五升をのり入るくおの首て其奇石なること知ら  
 とくども又つんとももりしは試に鉄槌をりて石頭を  
 打く是れ光を穿んとするに誤く兩断とすも忽ち石中

清水頃出たりこれを見らるに中自然の空所ありて水昌  
 なるも其奇観絶品とすべし即商人これを探り東武を  
 入る人おしよりどとつたは一日雅客来りて是を十五金に  
 ぶち即客の曰く石兩銭となすどんば正の直千金とす  
 とす

其三

高田より東三里山にありて二十余丁横沱川とすは後流在  
 内貝石成出るとも尋ね一蛸螺蚌蜆蛤蚶の故品も自然に  
 形文もつて弄玩をす一是をらぎに内実一玉石乃  
 潤沢なるもの又其大なるもの是をうち



くらまきるるに内よ小貝石成りむむ或ハ一或ハ二三蛤石乃  
 ら螺石成りむむのり又螺石の小蛤を合もあり管内実しく文  
 空所なり一々よくハ貝石自然に小成りむむのをさるる是ホ  
 の貝石をさるる奇なり予密に按むるに一口をく口を用く  
 なる皆く合も然も生貝土中に落入りて数十年を懸り  
 け及んで石とさるるのそ肉も亦小化しく石とさるる中  
 実もさるれば又土と合もぐ内実もさるるつづけく合も  
 理る一又螺の螺をふくし蛤の蛤を合もさるる貝子たえべ  
 他の小貝とさるるむのり是又不審なり凡北海呀と山中に  
 此類のりといふともさるるよく出ると呀横尾川にさるる古志郡

三宅村赤壁の岸ハ砂土一るんくにして海磯のいくハ一るん  
 のる貝石数万とあり香川啓益ハ造化の然る呀は類なり  
 とし予が四寺泊沢丸山氏哉後名寄に是ハ只山中自然  
 のもさるるぐ海中の貝売凡るにさるるさるる皆化しく  
 不見えさるる石とさるる理る一といふもど其説不明今  
 新に海底の枯貝売を以日に晒しむに湯さぶ湯もさるる  
 あり山中にあり呀の上古土中に落入りたる貝売さるる凡る  
 けさるるとも格別なり又貝原先生大和本艸に渾沌未分  
 前世界のもの可見といふ是又篤信の博識にハ方便に近  
 き説といふべし世界の變化一るんく子に天なり又ハ地



ぬり寅の人の生もるなんど其始とめきううの假説  
 何ぞ前世界との理ゆえ只天地の变化は只野山と  
 るれば彼野落へく海よりうづくとよの定りけられたる  
 川の淵とより流となるがど一只上古人智明なるよる  
 かゆの歴代と不記後人その原をわきううふせんがよる  
 天皇氏地皇氏天神地神なんど假にゆけよるとも  
 一只上古人形にうける獸のまに異なるよるまきりものと  
 ゆえれば三皇氏とよごも又よるまきりものと  
 入智闢より以後数千年のまきり何ぞ上古人におるど  
 かかん天地のまの只うらとよるむ智の日に新にうく二十年を

盤れば山川道路いづこまでおきかきるあなりまうて古ハス  
 勝地旧跡今只る野まきりかじされば見より後まきり  
 天地長久無事うらぶ桂海真衡志に石蠶石散産  
 ホとのぐは類々只く予が四の貝石の皆上古海磯のまきり  
 而もよるの文螺の小蛤を食の類わが知らざる野

其四

本業石の枋尾山谷の河堰の内十日町の山石雑波山ふは  
 く出るとよごり皆石性和らう小して灰白色盆池に入草  
 本と植るにうく水をあげく活く打碎に一片く諸本のまきり  
 おちより紋紋まきり面白くたきく小魚蜘蛛蛙など乃まきの



同いありく石とすれりものありは魚沼郡上田郡菟神乃  
庄大湯村 温泉の由る所 戸柄尾役村さるく川の奥日掛  
川とそは溪流の岸岩のありて掘出たりの黒色はくく  
堅実なり以硯とわるとは堪えたるをたぬくもかきとすあり  
ゆえ者へ以珍玩とすて

其五

蒲原郡茨曾根村里見氏の庭前に老松十圍あるもの  
あり枝々四隣に茂り掩ふく庭中老松は陰主人をたごを  
はくひ一日僕に命じく浅きむるの中をとりくらしく穴を  
以板に挽ちるよ土際八尺ほど上りく泥の函の穴換り切

とるも不能呼あり終に斧をとりて打りて見るとは文さ  
鞠のやぐなる青石ありく去る室一僕の云を火打石  
はせぶらふんと本挽即大斧を以是をくく忽金石の  
ひき成るく西鉄とわる中自然に丸く空呀ありて清あ  
傾きあらんく後悔されども不及可憐十和氏うきこと成  
是ホのもの良工の命じく琢磨せよ必明珠をく可憐こ  
今をさ是れ似するものあり言傳へ源平のむじ五十嵐小文治  
とく者勇力の歩ありて即三条五十嵐川の水上矢本  
峯流に臨んく数十丈の絶登勝地ありは流いつくそ五十嵐  
の神社古本大枝わらく一日小文治は呀れあり已が力をて試ん



五百川村

矢本明神



矢木峰



小文治村

五十嵐  
神社





と大石伐りつくは枝に打付しるる石即枝の中核の歩りくわらじと  
今もそを尾を足るに其枝根おより一丈をかり上よりそ石の大サ  
と尺ものらん喜色よ長く中く人力の及ぶべきらん人足ど  
尾又一奇し、称まへく

其六

出せし海の南勝海濱といしる所先年海岸の絶壁高き蛟竜  
おく海に各付て蛇窟れといし其後村老五た出つといしる所の  
一夜おく海上を望し足るに山のさざりて落る所水底に先  
のりて波上に月影をみるるがむく村老怪て夜々尾を試るよ  
從燥然より即勇壯の若者の命ごとく舟は海客光につまきく

水底をかり足ねおむしる一塊の白石あり尾をいして其の  
おくを即水上の光不足は石夜々照照席足る人市を  
がしと縣令おれをゆて下官に命じ借く足んて杖杖も村  
老舞もるとおれをいども終に尾を杖して東武に去る後三  
年へく其玉石已に光失くさる今其家尾と  
藏もといくども不堪弄玩実の惜むべし

其七

新茂田より東北加治中条の百路の傍田乃中に庚申  
塚あり塚の上は丈サ尺六寸たかりある高き石伐鏡とく  
尾を参りし石その先キ農丈屋後の竹林を掃除して竹

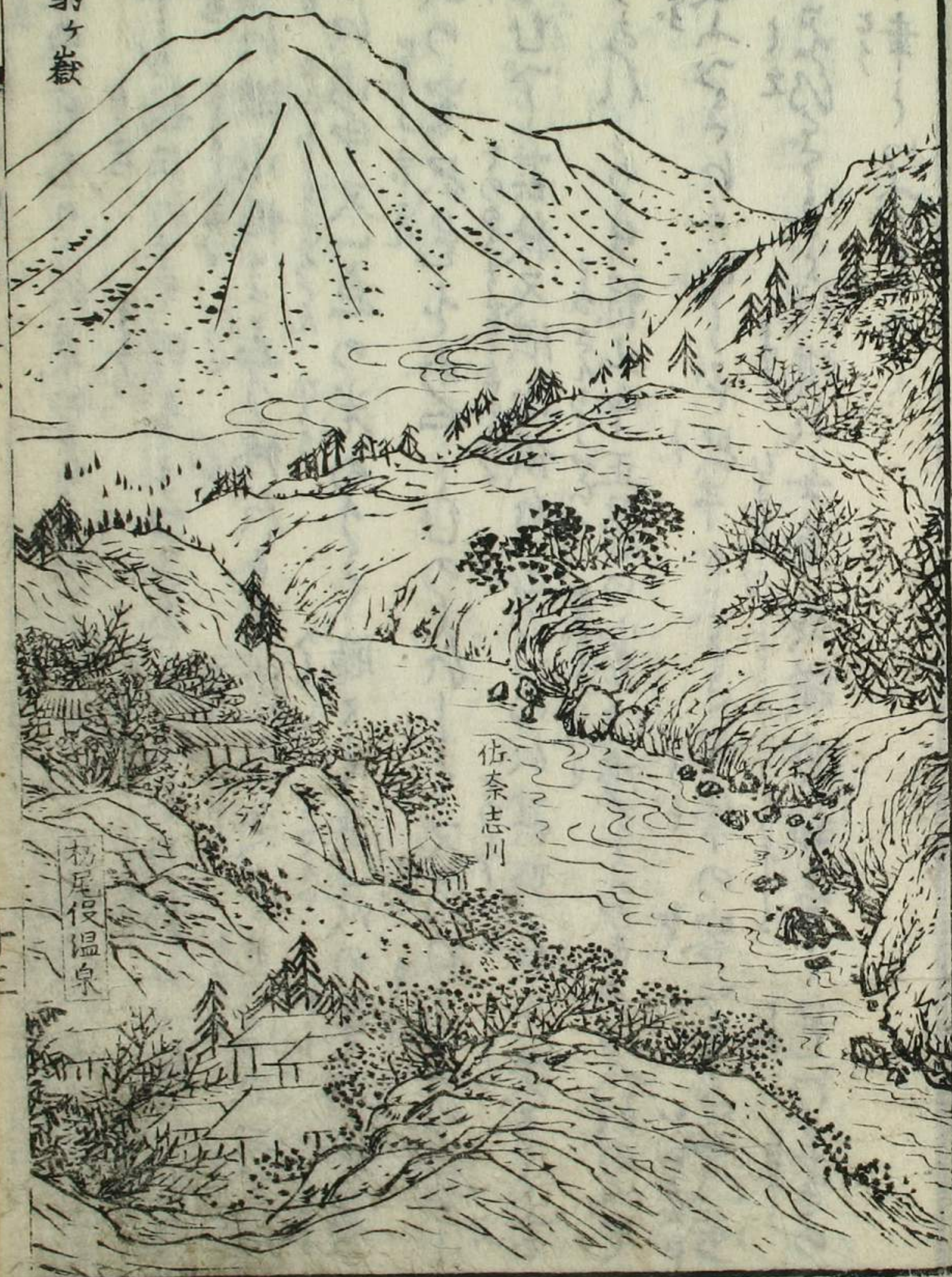


の根とくぐらひぬの石一ツをぬその色青黒と云ふ  
 りの農ま是をりつて葉を打盤と云ふ其夜家婦度  
 に出る光ありて燦然と婦人魘魅かりとて驚き  
 叫ぶ家ま若者三五人を伴ひありて光る物を打し  
 石かり比肩以怪ありとてそ名は竹林に捨り然その石  
 夜光ありて村中の老若共をれて夜寝ぬる依て  
 是を庚申塚に祭り上の泥をぬりて光をぬくも今猶  
 苔むら荒埃より予其地にいりて村老に乞ふか石  
 とおんととれども其たりありんばおそきゆりて  
 又お似たり一奇あり前ぬる佐奈志川と云ふ約ヶ

嶽の林大湯村と初尾保村の百餘山間の清流數十室を  
 めぐりその源なるぬづうづうがど初尾保の温泉の西谷に  
 ありて村をたると十町をかり深き林の中の湯小屋あり  
 つらにおおききささぬわんば入浴の人オ今もまれにて只  
 大湯より合せ湯のわんばありかむらごとく大湯へ村中よ  
 りのく百餘十人と浴とよく是熱の湯なり又川岸に滝の  
 湯あり是冷なり熱の症気頭痛打才癩氣を治す  
 疥癬濕瘡を治す即農家に入浴の人を痛くさすに不  
 自由なるは繁花といふはあつたれども困法なり景  
 色俗々むら川中の一とせ夏の湯也せり水中一矣乃



駒ヶ嶽



七  
代  
末  
次  
三

十三

白蓋山

大湯村  
温泉



北  
越  
卷  
之  
三



光のりてむのりに又やとらぬ螢うんどの水上に止るうとて  
 一が教回れしと野をうつささどめ武と十余日一日又まら  
 るに洪水俄にあり終にその光を矢と其後五六丁川  
 下に山中又一点の光のりく曉くと其夜の早乃にじ懸  
 まの案只是をわやしむのりく又るねおるのむさ  
 惜むべし其杖又洪水俄にありつるに其所在を失ると言  
 りたれしもの皆山中正恩の案は活をうまがびんぬりて  
 疑ふべしにものりくど只予がどま好東の客つらど其  
 と又のりくは珠のを食夜識金銀氣と是ワが案の  
 不幸といふべし

其八

柏崎の西南海岸にのぞく三十番神の社ありて  
 此山の禁を握りて一ツの壺はゆるめあり内皆赤土  
 海潮にのりひび其内白玉環一双勾玉管玉ホ教品有  
 日小児ホにけりつらめくは後知れる者あり漸くはくその品  
 あり六つをゆるるとくども其余所在を矢とおしむるま  
 きり予た多く是をうるに青緑白色奇玩絶品なり  
 密に按じむにじうより 帝都の乱とさけて貴人乃北  
 越ののれとあるもの志おわし今その系跡さだるま  
 とくども是ホ其人を葬まる地なるべし

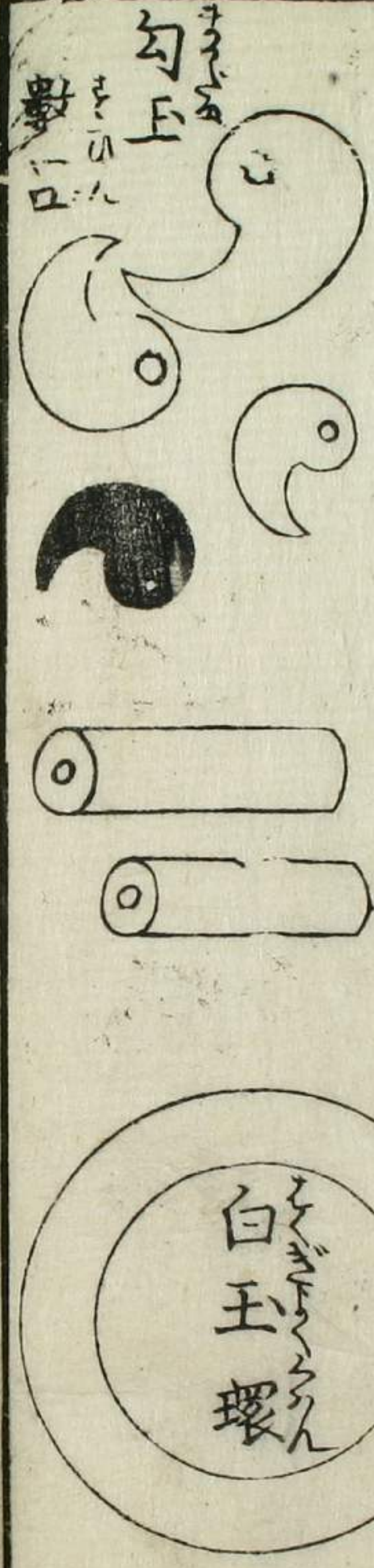


其九

寺泊より東一里竹森といふ所  
 牙古き石の跡ありく角  
 槽とわづき呀丸さく方なり  
 村の中路塚などつた  
 損むるもまゝなるもど其槽の土と  
 りくはとちまゝなるも  
 あり土中深く掘りしから  
 れ白玉の勾玉ひつ出  
 するも常にたゞその大  
 きう後其ゆるもの東武  
 のちそのえ

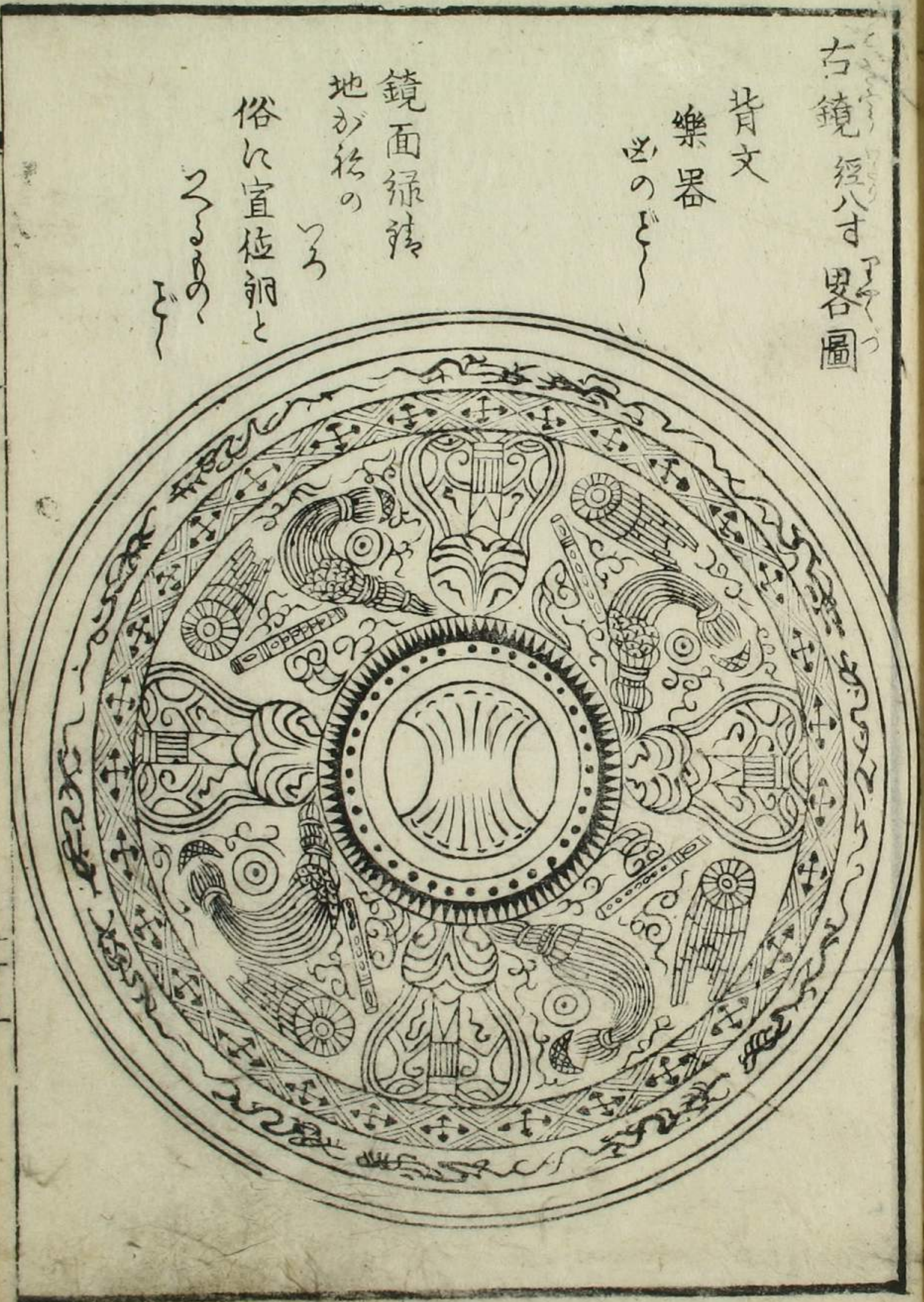
てふれを失と

管玉二種



右鏡 径八寸 畧圖

背文 樂器 凶のど



鏡面緑結 地が松の 俗に宣位朝と

つゝもの



其十

伊夜日子神社北一里竹の町村は野首蒲の観音とつる在  
 久矣險つらなるま古跡なり四面竹篁鬱然とく幽遠を  
 みる毎年三四月は竹を伐とまふらうとどるるそ奥、祥院  
 のり院のうらうら山の中段に首蒲塚と名付るもの方五六回  
 四面をサー一丈五尺又其下は猪ノ隼人の塚あり方三四回  
 一丈をありうり高倉の乱に頼政戦死の後臣隼人為蒲の  
 前を供奉しく北越に落下り終は地地葬るとり又伝ふ  
 るは人のうて密にかの塚とわぐに内尺一小餅古鏡一面  
 ありつねは是を市は賣るお侍と其古鏡は今予が友叔也

其十一

塚谷江氏の家に藏む其鏡徑八寸背文楽器面地金のうら  
 つまご小銀を下さるるがじ最唐鏡と小餅へ今野在を失と  
 竹の町匠村揺上とつる野は享保のちろ農夫某とつるの  
 一日葱をうり忽鋤のおれのける青あり老妻即金をうりて  
 け小密に是を掘れば一壺をとり数十行するものあり土を松  
 て肉と見れば金光眼を射るがごとく爰に野衣をうりてこれ  
 とけく家にかくしつる御藏貯入とつるとも皆異形なり  
 用由ぎ野る一偶予が父の二片と半をうりて今の金交易  
 して成りむ父其金位をかりがとまるとりて是を新野行某に



かろるそのよき其餘又あるそのよくとばあしそのよくども老まのそのよく只は二片のそのよく  
くくそのよく姉を呼そのよくなそのよくくと其金異形左にそのよく必とそのよく

其十二

天明六丙午ひのえひまかりとさあうつらうちひ羽形五日市村の多民某一男子ありと又  
とも家そのよく大なるがそのよくびにそのよくまじく東武そのよくのありと己そのよくの年  
只老まそのよく婦家のありとそのよく農をそのよくつとむそのよくそ子そのよくを連そのよくんそのよくと成欲れ  
とも不能そのよく茅屋のま入そのよくに只一丈梅樹ありとそのよくれと切そのよくくそのよく萩と  
る又その根をそのよくちりそのよくよ細物そのよくのありとそのよく西新そのよくとそのよくり  
あびくそのよく是をそのよく入るそのよくに金光そのよく燦然そのよくとそのよくりそのよく凡十有五枚老まそのよくその  
金そのよくありとそのよくばあしそのよくども寺僧そのよくのありとそのよくたそのよくやそのよくくそのよく其金そのよくありと

とそのよくるそのよくくそのよく終に領主そのよくの上とそのよく似そのよくさそのよくれにそのよく通金そのよく数そのよく百そのよく金そのよく張そのよく場そのよくと

其十三

其のわさそのよくりそのよく其異形そのよく龍そのよくとそのよく必そのよくとそのよくりそのよくとそのよくりそのよく  
明和年中そのよく三番そのよく那そのよくのそのよくらそのよく金銀そのよく数そのよく百そのよく成そのよく地そのよく中そのよくにそのよく掘そのよくりそのよく者そのよく在そのよく  
その金銀そのよく異形そのよく是そのよくとそのよくるそのよくとそのよくりそのよくとそのよく人そのよく秘そのよくしそのよく不そのよく可そのよくとそのよく思そのよく  
ハ尤そのよくのありと又寛政四壬子そのよく字そのよく田関町そのよくとそのよくりそのよくるそのよくはそのよく古銀そのよく  
一片そのよくをそのよくちりそのよく出そのよくとそのよく者そのよくあり其形そのよく文そのよく龍そのよくのそのよく比そのよく  
只そのよく此そのよく二そのよく必そのよくの友人某そのよくがそのよく必そのよく池そのよくとそのよく潜そのよくれるそのよくりそのよく

其十四

古銭そのよくをそのよく去そのよく中そのよくよりそのよくちりそのよく出そのよくでそのよくるとそのよく呼そのよくこそのよくのありとそのよく以そのよくとそのよくりそのよく  
二三百そのよく乃至そのよく一二そのよくやそのよく文そのよくにそのよくとそのよくぎそのよくぎそのよく安永そのよく年中そのよく蒲系そのよく那そのよく及そのよくてそのよく由そのよく



とふる所はく耕して泥中に古銭一壺を掘り出し九十枚あり  
 皆永樂の文化三丙寅頸城郡南新保村農夫某田  
 と知りて古銭五枚又と掘り出し古金銀銭まじりのり  
 一とて傳ふれども其実を尋ねて銅銭は皆洪武永樂熙寧  
 ホナリ予偶寛政四壬子の某伊夜日子のありて岩室の温泉  
 に浴し数日逗留せし隣村福井村何某しつる漆屋の藍の  
 桶とて掘り出し古銭とある大サ幅三尺長サ一尺ありし箱乃  
 飛りて只一塊のありしなりとてその数もわづらひて成るる  
 也此もの二つありて一は御にしく斧とりしとて打つて其  
 兄才夜と密に槌をりて銭紙おとすありし百銭とて

ハ二百銭のこまらでけりしひがごとく隣村あるゆいに  
 ありて其のひはれバ予即客するの主を尋ねて其家たづね  
 けりしかの古銭を賣人となせばおび家主即ちこれをゆるす予  
 とさぐるに只金四両あり以古銭二十四枚文を以て後領主  
 へ申しまゝのありてさうあげをゆるすよしく不賣家  
 にかりて数日これを弄玩するにその錢土につまみし方へ思  
 くうらむけきども銭紙おびをりしとて所は録録ふく  
 生じて文字も不分明に御くごまきとてこれをみるに一冊文  
 のうらむけきとて洪武永樂八九百文あり其餘平銭数両珍銭  
 へたるなり少あり凡兩枚百十

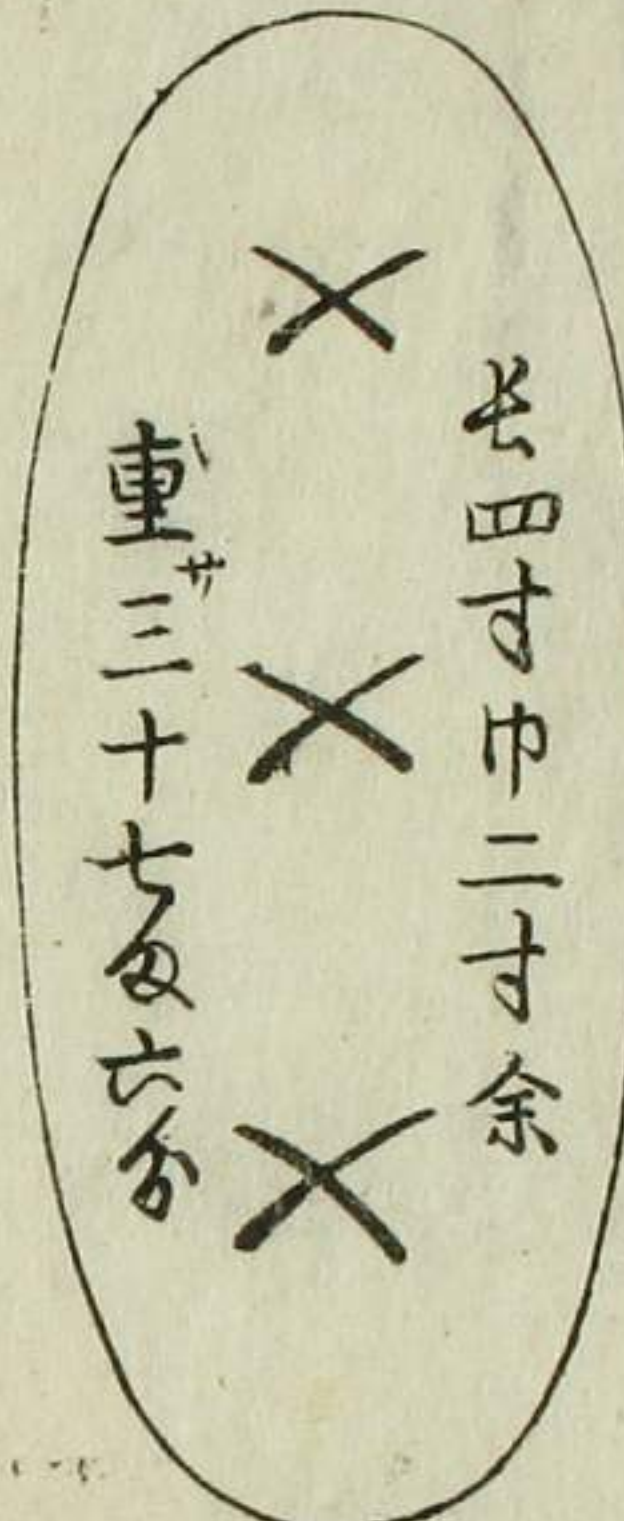


北走卷之三  
揺上村古金三尾



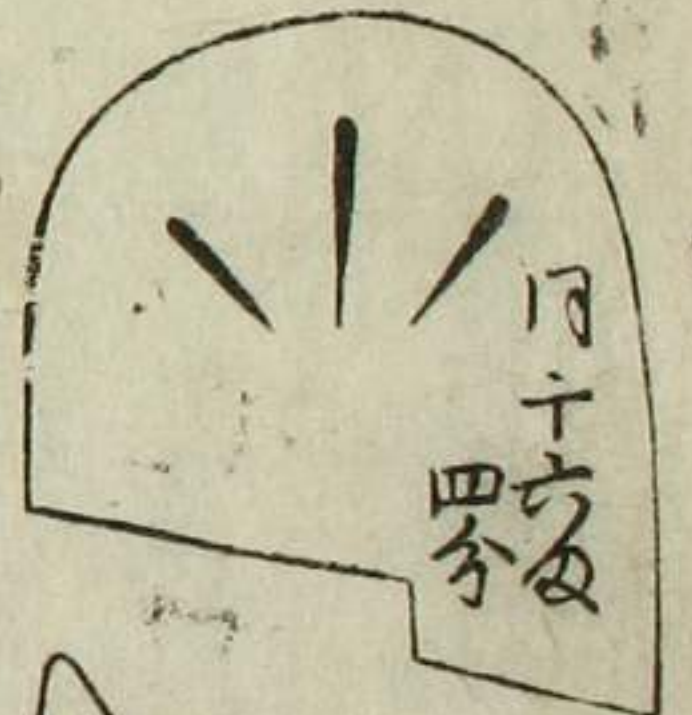
重サ三十二匁

五月市村古金十有五枚



長四寸巾二寸余

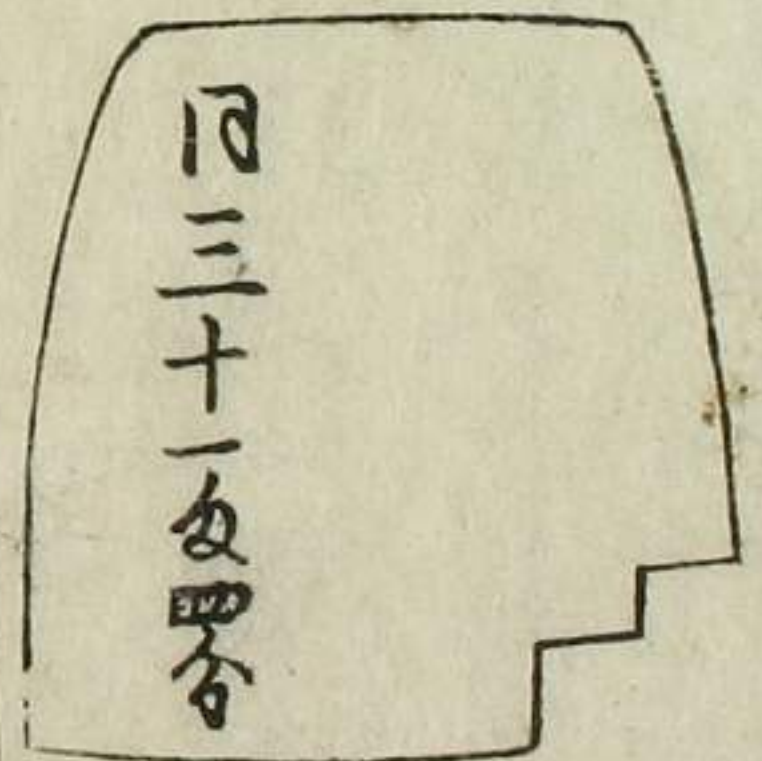
重サ三十七匁六分



同十六匁四分



同二十一匁七分



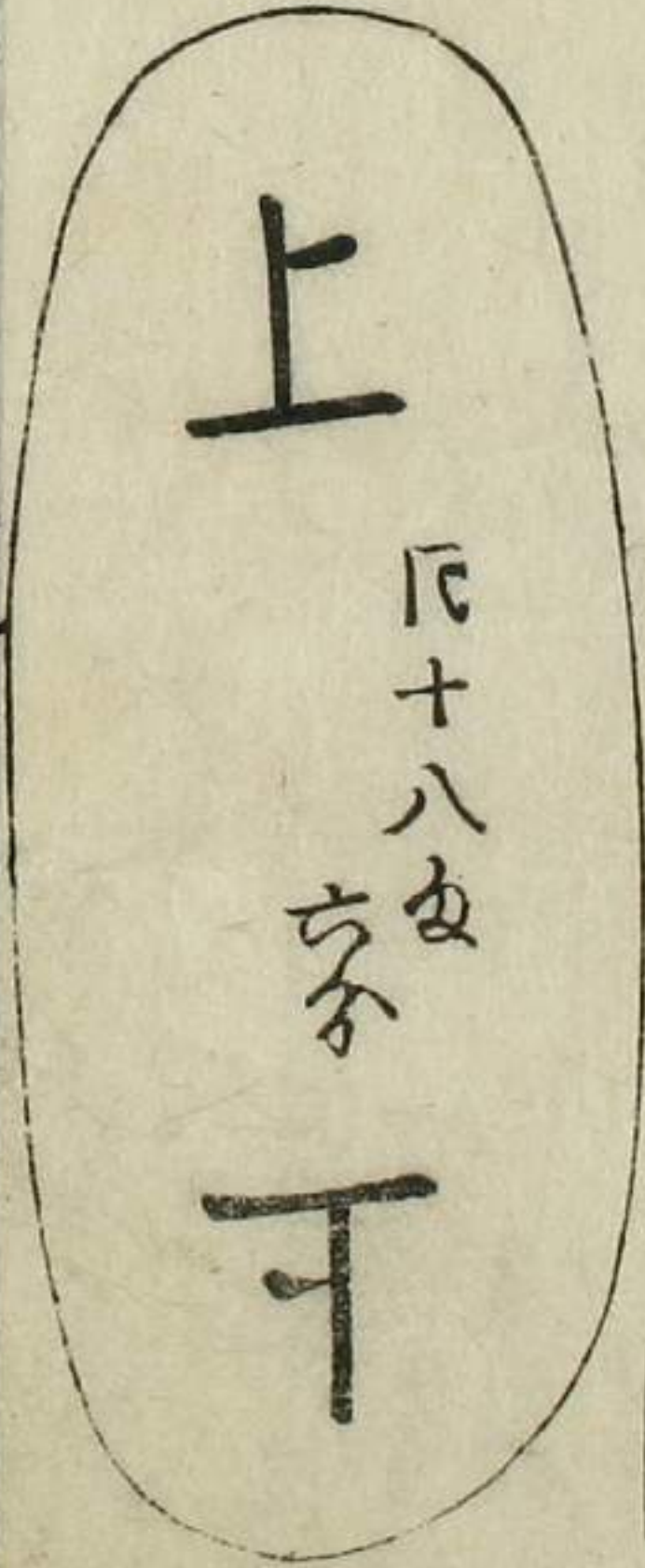
同三十一匁四分



同二十匁四分



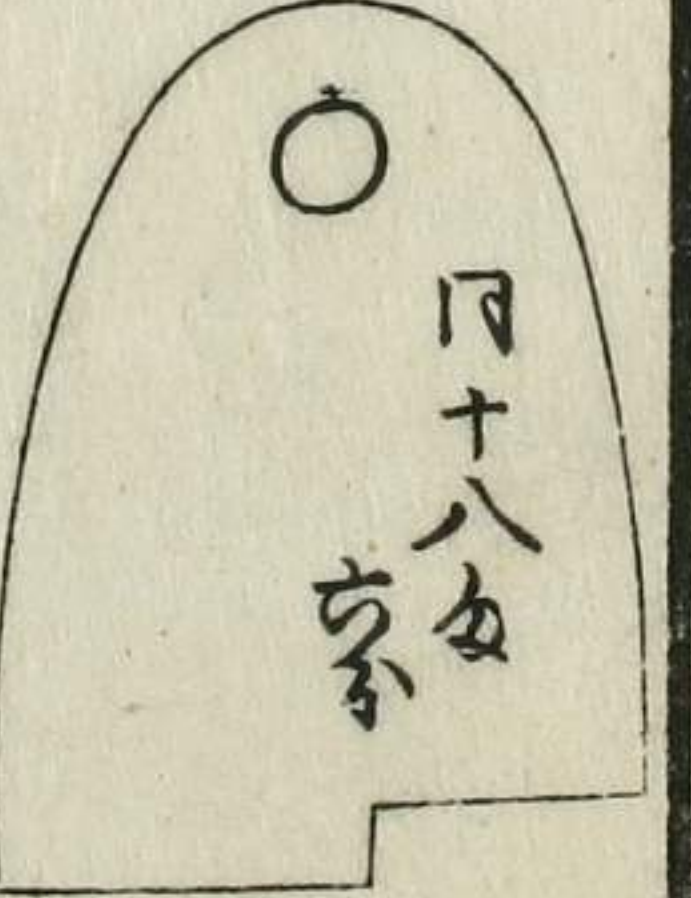
重サ三十七匁一分



同十八匁五分



重十八匁



同十八匁五分

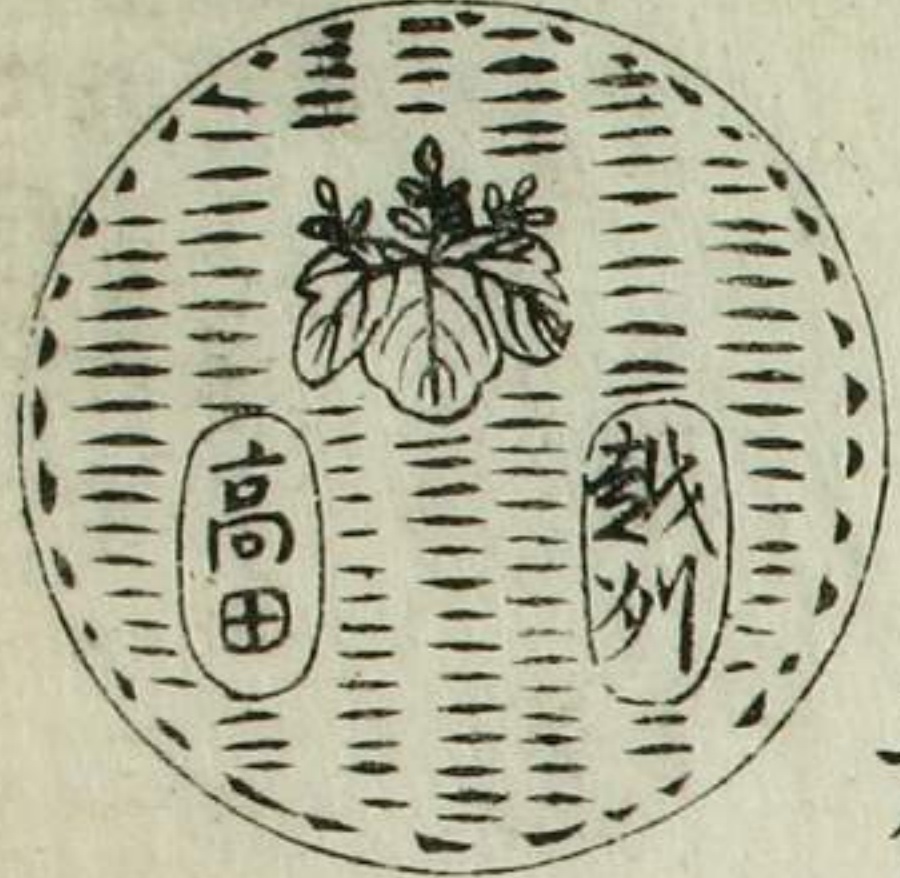
無文金  
二十九匁四分  
十九匁四分  
十三匁五分  
十二匁二分二枚



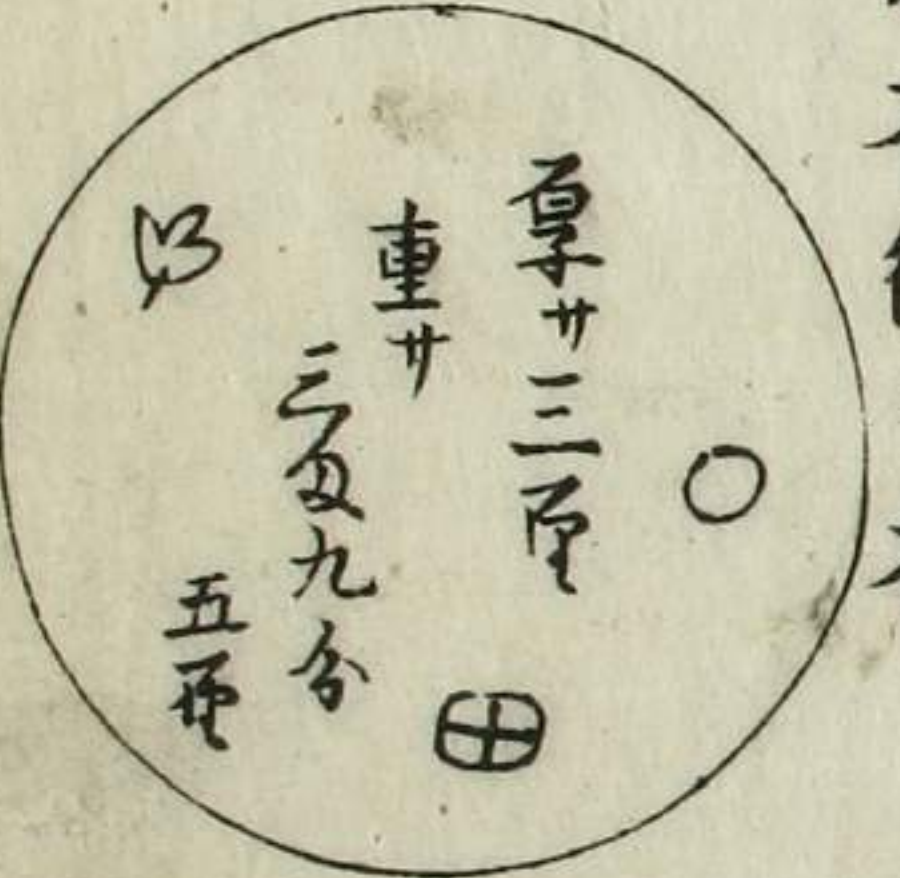
同二十一匁五分

同形無文ノ金五枚  
只同カニあり相違あり

表文



背文



重サ三匁  
重サ三匁九分  
五匁

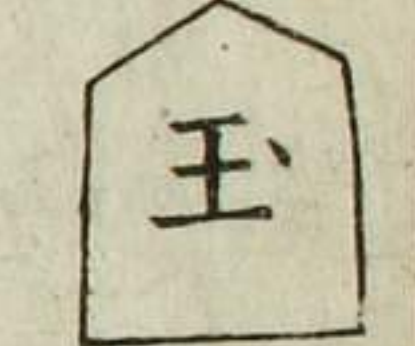
三島致有得の者

高田小判と共三枚



上枚謙信鑄之

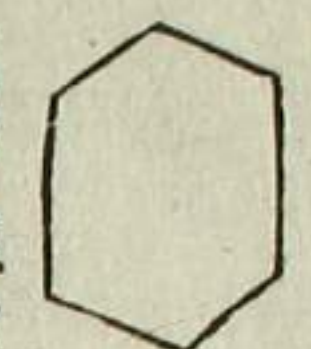




柏崎



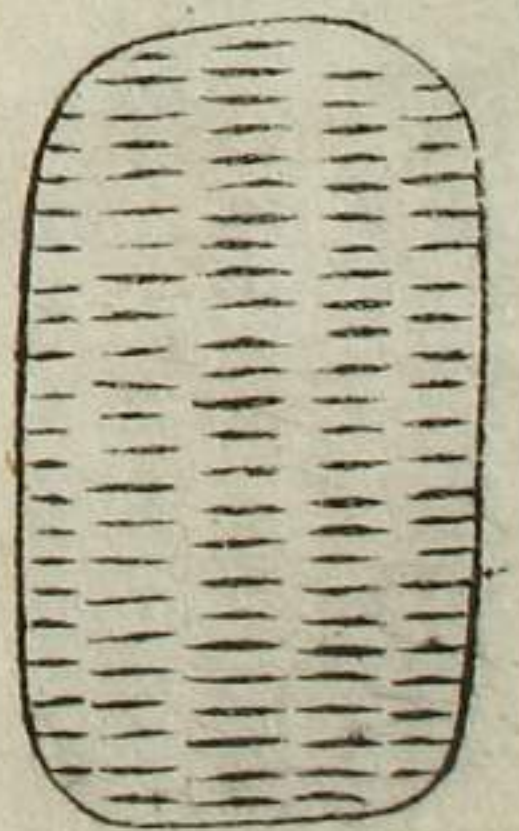
村上銀  
此品皆  
切てはえ



糸魚川

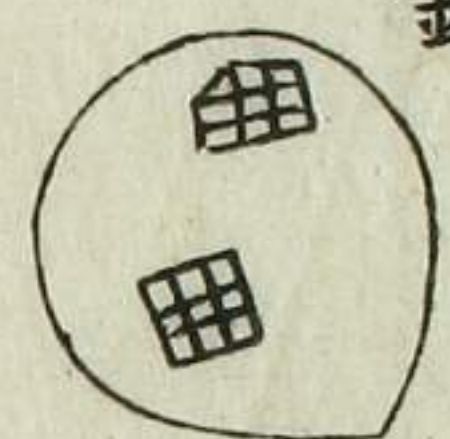


御藏花降銀  
重廿二匁  
形不定  
銀小判



新浮銀

高田岡町古銀



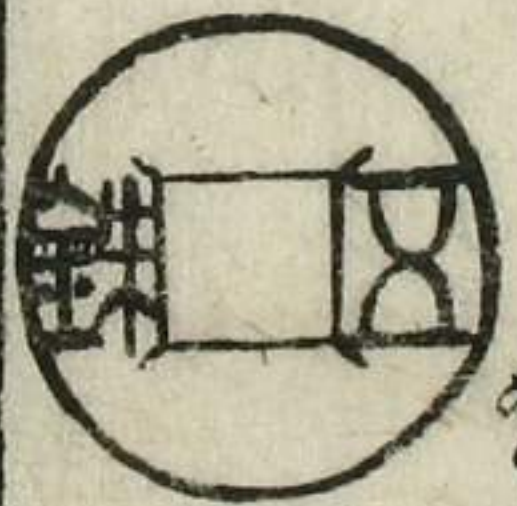
重廿  
二匁二匁



徑八分



徑六分五厘



徑七分余  
文字あり



徑七分  
文字手あり

○福井村古銭内珍銭数品

二字 篆文



小銭  
徑二分余



二重輪  
徑八分



中銭  
径一寸  
二分余



中銭  
徑一寸  
二分



徑八分余

一品たましく中銭まじりそよら珍と稱するもの  
 必のむく大半兩一短八分小半兩二三銖一布泉二五銖四  
 建元元寶二字篆一紹興通寶小形一中銭八乾重元寶輪  
 開運元寶一淳化元寶大銭一嘉熙通寶一嘉定一



十六ヨリ其  
数亦あむるは  
たは皆唐銭  
のし  
と和錢ハ一  
ツも一ツ  
永樂のり  
りといふ  
も五百年  
前の乱を  
さけ他邦  
に  
走るもの  
を埋め  
たりと  
かむ也  
其の  
十五

其十五

松の山浦田口村山氏所蔵の石鯉一尺余頭の方半尺二寸  
わしものあ  
る鱗  
は積  
全く  
その  
なり  
金  
墨  
色  
交  
る  
一  
と  
せ  
る  
山  
の  
峯  
片  
か  
け  
落  
く  
谷  
に  
入  
一  
樵  
ま  
り  
そ  
の  
呀  
に  
お  
ま  
り  
竹  
ぎ  
ら  
る  
ら  
う  
も  
ゆ  
ら  
う  
呀  
数  
十  
丈  
上  
に  
金  
色  
の  
物  
日  
に  
映  
じ  
て  
見  
ゆ  
推  
ま  
即  
黄  
金  
なり  
と  
い  
ひ  
たり  
是  
を  
び  
ん  
と  
成  
欲  
した  
り

たは  
む  
く  
た  
べ  
う  
く  
ど  
あ  
る  
と  
ら  
う  
や  
り  
呀  
の  
つ  
れ  
バ  
片  
は  
と  
は  
ら  
う  
く  
己  
の  
か  
ら  
ん  
と  
も  
あ  
る  
と  
あ  
ら  
う  
か  
を  
出  
し  
其  
お  
ま  
り  
つ  
ま  
し  
れ  
バ  
か  
の  
金  
色  
や  
ら  
う  
が  
さ  
う  
出  
る  
土  
ぎ  
ら  
う  
折  
り  
是  
と  
た  
ら  
谷  
に  
落  
り  
お  
ま  
り  
な  
る  
呀  
の  
お  
ま  
り  
は  
即  
鯉  
魚  
の  
か  
ら  
の  
方  
半  
より  
折  
ら  
る  
なり  
其  
後  
好  
み  
の  
め  
そ  
乃  
尾  
の  
方  
を  
掘  
り  
ゆ  
く  
今  
ぞ  
他  
の  
家  
に  
藏  
む  
と  
り  
予  
未  
見  
と  
い  
ふ  
金  
基  
紀  
聞  
云  
縣  
河  
灘  
上  
有  
乱  
石  
石  
魚  
長  
可  
二  
三  
寸  
天  
然  
鱗  
鬣  
或  
雙  
或  
隻  
不  
等  
と  
の  
り  
此  
類  
多  
す  
と  
い  
ふ  
其  
の  
十六

其十六

頸城池舟上原氏所蔵石ころりおを藏むその形河貝子



のむく毛サハ寸又貝の化石のわくど自然の孔ありく  
 是を吹に其まき清る筆葉のむくさくきりりて教  
 いまもも以樂器とすその地より其石鍬文かく形葉  
 一く雅かり 月宮は村池田氏胡氏石代藏む外堅実葉  
 皮黄赤色を西片を内自然に肉白く仁ありて真  
 のむく 月深町田中氏本賊石絶あから代藏む己の込に  
 のむくも 月梶村田中氏大勾玉三品代藏む其必石鍬の  
 部に出と月高田注町大眼寺に牛額珠あり丸くて少  
 平あり灰色の毛濃に包くさるめど倉石氏に北越の  
 奇石家にくく産とす呀教百部一くめぐるいといふありくど

只予か國の産物追て考後編に出と月系魚川上出村神社  
 その神祇只白玉一双あり誰人のおさありとすて代藏む

其十七

三名山浦系の那境五千石村武久礼の神社今荒れて小社  
 あり其神祇ハハ花形の古鏡なり何色のときさる是をおさ  
 けん近來は神を以野中才とる寺にうつるとり

其十八

長岡後中島氏の家に秘蔵する呀解毒石あり大さ卵  
 色を黒蛇の毒おび一切の毒を治すとす痛む呀に石  
 押當れば即毒を吸おす瘡を治す石代以乳けいひとせ



皆其毒を吐きおせり是外四の産その名氏忘失も三島郡  
島崎村加名らと之るものお代家に傳へる一塊の小石あり  
その名をまじりて只血を止るに妙なり諸血皆治とけ石  
と疾口につれば忽血止り痛去と之り

其十九

妻有郷十日町山中絶壁の下乳石以出と志と上取れた  
常にそりゆると難一河内谷より出る所の石髓山石下  
ちり大塊をうつりての百蛇おまるといふがごく奇怪の形  
へうとどけ内乳石と生じ五泉何某の産とも所は四尺斗  
回一圍半九の必と堅實に一と刀刃の乃と所はあつど其

色光白といは昌のくおとれるものなり

其二十

鉢伏山のやうなる岩次才にそり深遠ふべうとど一日推ま  
谷のりくは茯苓をちるよ大塊の白石其色少く赤く  
赤く五や目ながらりうら紋はより推まゆとつとん知ざれ  
ともそ色の光沢はものをりくは是を搦ふく長巻の市  
に毒るお屋は某するもの是を買はく弄蛇とるに一  
日浪華の高人ありて強くあれと求む其名づくるは蠟  
石のりんと代以を終は是よ賤る予按ざるに瑪瑙なる  
づま可憐



其二十一

糸魚川より山中九里に蠟石山のり山のり三里の  
 頂より谷のりへ皆蒲萄石色少くやううなるがゆへ  
 以印文をうとふ不堪と之をも潤沢ありく可愛此地の人  
 是を切みく温石とよみ諸方に賣亦以香合肉地まんご成  
 作るべく予いもご山に拵らぐも賑らぐ其上ある所  
 くらねわごらざるよは

其二十二

大湯村 前出より今津に越野約ヶ稜の汝谷へ入る  
 三里に化石溪とならぐ所あり艸本と名く虫羽の

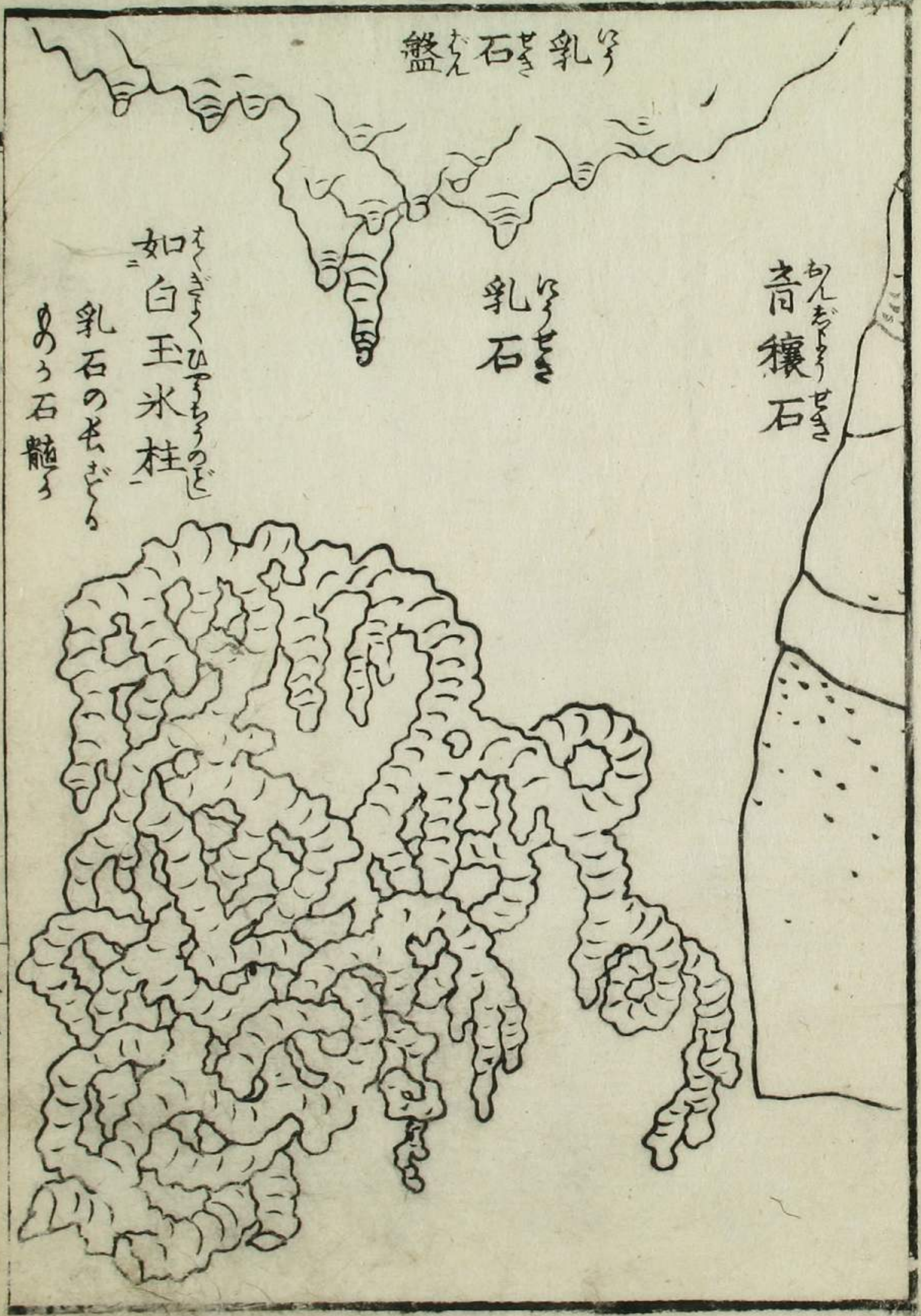
類とわくは流に落入の一周年成歴く皆化石とわく  
 夏田と之をも苦寒といくく又蘆門山の北  
 下田々の汝谷に化石も所ありと之傳ふ予いもご地へ  
 出るべし北越奇石を出る所ありと之をも河内谷  
 大湯村佐志川のをも尤多し頸城徳浦又海石の奇石  
 出をも好むの人くらねわごらざるよは

其二十三

木板三輪氏富士石成産をわたりて絶品真黒色半腹の  
 白雲の形あり床頭の弄玩可知 長岡原氏陰陽二石成産  
 も男女根形産むる今絶品なり 水原の東北に田村よ



珠山と云ふ書画凡流の人ありし其家に龜石状花を一塊  
 の石上自然に小龜の形ありて工にせらるるごとく  
 氏烏帽子石状花むす石の緑をど奇なりしが今  
 朽尾某の家に贈るとりて堀の内某の家一奇石状花む  
 形上下六面皆表にしく床頭の弄玩妙なりと云ふ今  
 家の姓谷を忘る予一年約ヶ嶽のあそびく深谷の  
 考石代は真黒光沢似廬山大漢布の勢あり故廬山  
 石は名づくたに思をありしを



乳石

乳石

音穰石

如白玉氷柱

乳石の老



廬山石

予一年秋八月公温泉に浴し、くわく、溪流より  
 奇石、成さぐり、亦む、意に適する、其の状  
 深谷の洞、ふし、一推、丈の、人の、曰  
 依て、う、安に、あ、ると、予曰、奇石、成、求  
 んと、欲も、推、ま、云、我、前、日、黒、石  
 一塊、を、の、く、尾、を、庚、申、塚、の  
 う、う、ろ、の、め、く、も、君、意  
 あ、ぶ、ひ、く、去、べ、と  
 茲、に、お、伴、つ、く  
 予、所、に

予、一、年、秋、八、月、公、温、泉、に、浴、し、く、わ、く、流、流、よ、り  
 奇、石、成、さ、ぐ、り、亦、む、意、に、適、す、る、其、の、状  
 深、谷、の、洞、ふ、し、一、推、丈、の、人、の、曰  
 依、て、う、安、に、あ、る、と、予、曰、奇、石、成、求  
 ん、と、欲、も、推、ま、云、我、前、日、黒、石  
 一、塊、を、の、く、尾、を、庚、申、塚、の  
 う、う、ろ、の、め、く、も、君、意  
 あ、ぶ、ひ、く、去、べ、と  
 茲、に、お、伴、つ、く  
 予、所、に



予、一、年、秋、八、月、公、温、泉、に、浴、し、く、わ、く、流、流、よ、り  
 奇、石、成、さ、ぐ、り、亦、む、意、に、適、す、る、其、の、状  
 深、谷、の、洞、ふ、し、一、推、丈、の、人、の、曰  
 依、て、う、安、に、あ、る、と、予、曰、奇、石、成、求  
 ん、と、欲、も、推、ま、云、我、前、日、黒、石  
 一、塊、を、の、く、尾、を、庚、申、塚、の  
 う、う、ろ、の、め、く、も、君、意  
 あ、ぶ、ひ、く、去、べ、と  
 茲、に、お、伴、つ、く  
 予、所、に

山、為、殿、王、石、賜、來、巧、而、多、宜、三、寸、自、我、瀑  
 入、團、玉、質、碎、上、虎、溪、每、送、客、麻、洞、自、其  
 屋、几、上、坐、年、玩、以、推、亦、可、寄、也

以、寄、掃、落、世



廬山石

崑崙崑崙士才字石几席字生玉一堆  
若不承山之上得會從星宿海中來

如真亭題



廬山石記

長短亦形之六亦似老君之言大矣哉物  
殊年定於高下而人誠于分於長短從  
之目之所置多而變焉已在我墨存心  
於柔丈之人而後正嶽小於指矣禹我  
目於蠢蠢尔之出此日之解目毛以云於標社矣

是之謂之遊也亦莫殷焉余遊越占崑崙  
橋君筆矣君善畫最名于山水乃其不  
則未道西邊不名所之焉謔遠近於我眸  
詢而吾於我睡曰是亦為蹙足之也歸  
則峙石縹沙以象于嶺山邊清冽曰是我叔  
飢渴之洲也其所最委之石曰廬山也古  
字才於長於解九分廣如高而減四分重十  
二斤漆黑形如路牛守皦必纖條自脊  
嶺出行以面流斜至膝密歧為二條偃蹇  
拄頤歛卧以五之宛然兄廬瀑吹烟為雲



右息為飄風當時君之哀甚適且為去亦不  
 丈之人乎將蠢爾之而中乎思亦為論此石古  
 亭山乎將十二斤石乎思亦為論今日文化  
 之乎乎物莫自之世之懷之也乎思矣矣矣  
 君之樂之不已

乙丑之初夏五州府

隱士古之懷是也人轉記



北越奇蹟卷之三終



